講　演

かくれキリシタンの祈り

皆　川　達　夫

私のような者の話のために，これだけ多くの皆様方にお集まりいただきまして，たいへん幸せに，そして光栄に存じます。そして，ここにいたるまで，いろいろご配慮いただきました学長先生，柊先生，その他の方がたのご厚意に，厚くお礼を申し上げる次第でございます。

「どうしてキリスト教という宗教は，あんなにもすばらしい宗教音楽がたくさんあるのですか。バッハも，ヘンデルも，ハイドンも，モーツァルトも，ベートーベンも，みんな立派な宗教音楽を作っているじゃありませんか。どうしてそんなにキリスト教は音楽と深い関係があるのですか」，というご質問を，よく頂戴いたします。それに対して私は次のようにお答えするようにしております。

この世には，古今東西たくさんの宗教ございますが，そのなかの多くの宗教では，本来目では見えないはずの神様仏様を，なんとか「目で見る」形にとらえようとします。一番原始的な形では，何か恐ろしい，あるいは不思議な，泉とか，山とか，川とか，海とか，そういったものの中に神様がおられる，と信じ，それを「目で見て」神様仏様に接し，それに敬意を表そうといたします。こういう信仰の形は，実は日本にもたくさんございます。

たとえば，皆様方が奈良県に旅行されますと，大神神社という有名な神社がございます。そこには，拝殿はあるのです。お賽銭をそなえて拝むところはある。ところが，拝殿があるのに，普通神様がいらっしゃるはずのご本殿というところがございません。そして，その拝殿の後ろに，海抜500メートルちかい美しい山がそびえております。三輪山という山

でございます。これは三島由紀夫の小説にも出てまいります。その山が，神様なんですね。それを拝む。これが本当の「山の神」，ということです。(笑)

あるいは，九州の高千穂町をお訪ねになりますと，断崖絶壁のところにひとつ洞穴がある。それを川のこちら側の神社から拝む。その洞穴というのは，天照大神が怒りのままに隠れられたという伝説の洞穴と信じられている。その洞穴に神様がおられると信じてお拝みになるわけです。

更に信州，長野県に参りますと，有名な諏訪大社というのがございます。上社と下社ふたつにわかれております。が，これもまた，拝殿はあるのですけれども，ご本殿がない。拝殿の後ろに白い丸太の柱が四つ立っておりまして，その丸太の柱で囲んだ中の地域に神様がおられると信じられている。その丸太を，何年かに一度八ヶ岳から挽きだしまして，諏訪市の近所にものすごい坂がありますが，その急な坂を，挽きだした丸太をごろごろごろと転がす。そして男衆がみんな，その丸太に飛び乗って落ちていくんですね。丸太に轢かれて死ぬと，天国間違いなしという。そういう行事を今もやっているのです。そしてその挽き出した4本の丸太の柱を立てて，その中に神様がおられると信じられている。

もっとものすごい例があります。東北の，山形県ですね，湯殿山神社というのがあります。昔から修験道で有名なところで，羽黒山，月山と，非常に美しい山です。その月山から断崖絶壁を下っていったところに，その湯殿山神社というのがあります。私も一度後学のためと思って行ったんですが，月山から，急な断崖絶壁を降りる。鎖を何回も使って降りて行ったところに，その湯殿山神社というのがあるのです。そのご神体が何であるのか，絶対に言ってはいけないことになっております。言うと祟りがある。びっくりしましたことに，まずその神社に行く前に，履物をとらされて，ズボンをめくらされて，カメラ，ノート，要するに記録するものは全部とりあげられて預ける。そうしてぐるっとまわったところにその御本体があるのですが，これが何であるか。言うと祟りがある。

私は今，言うべきか言うべきでないか迷ってるんですが，まあここはキリスト教の学校でありますので，言ってもいいでしょう。もし万一私が急にここでひっくり返ったら，祟りだと思っていただきたいのですが，

(笑)これが，驚きました。この講堂の下の階の半分くらいの大きさですが，温泉の排出物，要するに硫黄の塊なのですね。硫黄の塊が，ちょうどお饅頭のような形にこう，そびえている。そして今でもとうとうと温泉，お湯が湧き出して，ひたひたひたひたと流れている。これがご神体なのです。おそらく昔の人は，この神秘的な形に，ここに神様がいると信じたのでしょう。まあ無理からぬことだと思います。そして信者たち，というか参詣してる人は，裸足になってその山を登ります。ひたひたひたと，温泉が足もとを流れる，不思議なところです。

芭蕉もここを尋ねまして，「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」，と「奥の細道」に詠んでおります。語られぬ湯殿にぬらす袂かな。〈言ってはいけない，祟りがある。それほど神々しいこの湯殿山に参って，感動の涙で袂をぬらした〉，というのが表の意味ですが，実はその温泉がひたひたと流れて，自分の袂もぬれてしまった。「語られぬ」と言っておきながら，「他言を禁ず。よって筆にとどめて記さず」と断っておきながら，裏の意味で「温泉」を暗示している。さすが芭蕉は芸が細かいわけでありますが，そのようにして「奥の細道」に詠われている，そんな神社もあるのですね。私に祟りはまだ来なそうですね。(笑)まだ気持悪くなりませんから，もう大丈夫だと思います。(笑)

そういうわけで，原始的な形のときから，人間は何とか「目」で神様仏様に接しようとする。更にこれが文化的な宗教になりますと，たとえば仏教にしましても，古代ギリシャの宗教にしましても，本来「目」に見えないはずの神様仏様を，絵で描いたり，彫刻にしたりして，人間は，それを「目で見よう」とする。日本の神道の場合は，ご神体といって，たとえば鏡であるとか，あるいは木像であるとか，そういうものを「目で見える」形で祀る。要するに人間は，「目で」神や仏と接し，「見る」ことによって神や仏に接しようとする。

ところがご承知のように，キリスト教は本来偶像崇拝禁止であります。神の姿を彫ったり，描くことは基本的に禁止されている。カトリックの場合，マリアの像，あるいはキリストの像というのはございますが，仏教の仏像，仏画とは多少意味が違っているわけでありまして，キリスト教では本来，人間は，神の姿を「目」でふれることはありえない。それ

ではキリスト教はどうやって神とふれあうのか。聖書をごらんになればおわかりですね。神は言葉をもって語り，人間はその神の言葉を「聞く」。つまり，「耳で聞く」ということが，「目で見る」ということよりも，もっと重要な意味をキリスト教では持っています。

つまり，キリスト教以外の宗教では，宗教芸術として「目で見る」美術，絵画，彫刻，あるいは舞踊が重要視されます。たとえばインドの宗教や，バリ島などでは舞踊も，大切な宗教芸術であります。ところが，キリスト教は彫刻や美術，これにももちろんすばらしい作品を生み出しておりますけれども，それ以上に，「耳で聞く」，音楽を最も重要視する。これがキリスト教の立場であり，中世の昔から綿々として素晴らしい宗教音楽を作り出してきた理由でもあると，私はこのように説明しているわけであります。

したがって，1549年に，初めて鹿児島に上陸した宣教師，フランシスコ・デ・ザビエル，あるいはシャビエル，という方ですが，この方が日本でキリスト教の伝道を開始されるのと同時に，キリスト教の宗教音楽，キリスト教の聖歌，つまり西洋音楽，洋楽というものが，この日本に渡来することになりました。そして，ザビエルが日本に来られてから6年後にはもう，九州の大分で日本人の聖歌隊が組織され，ラテン語の聖歌を歌って，ミサ典礼が行なわれたという記録がございます。

更に，日本各地に神学校，セミナリオやコレッジオ，というのが組織されました。その神学校の時間表が残っております。なんと1日に1時間，毎日ですよ，音楽レッスンが1時間，課されていたのです。いま日本の小学校や中学校は，音楽の授業は一週間に一度くらいじゃございませんか。それから比べれば，毎日1時間の声楽と，楽器演奏の時間が課せられていたというのは，たいへんなことであります。

その神学校から四人の少年が選ばれて，1582年，日本を船出いたしまして，ヨーロッパに向かいます。いわゆる「天正遣欧使節」の4人の少年たちです。今ですと我々は，ジェット機に乗ればその日のうちにヨーロッパにつくことができますね，ところが当時は帆船です。しかも，嵐にあい，病気にあい，水不足に悩まされる。のみならず，帆船ですから，

ひとつの港につくと，また次の港に行くために，都合のいい風が来るのを待たなくてはいけない。いわゆる「風待ち」というのをいたします。

ですから，長崎を発ちましてマカオに着きますと，マカオですでに十ヶ月ほど風待ちをいたします。続いてマラッカについて，また風待ちをしてゴアに着いて，それから，まだスエズ運河はございませんから，ずうっと南を回って，2年経って，ようやくヨーロッパにたどり着きます。

四人の少年は，初めて見るヨーロッパにカルチャーショックを起こします。しかし，その反面，記録が残っておりますが，ポルトガルのエーボラという町，これは京都に似た，いいたたずまいの町ですが，そのエーボラ大聖堂，カテドラルに連れていかれます。「君たち，見て御覧。ここに何かこう，太いパイプが何本も並んでいるだろう。これはね，音楽を演奏するものなんだよ」「ははぁ，これはオルガンでござるな」「君たち知っているの？」「それがしども，弾けるでござる」。

「冗談言っちゃいけないよ，こんなもの弾けるはずないでしょう」「いや，弾けるでござる」「じゃあやってごらんなさい」。

記録によりますと，少年たちは臆せずに大オルガンを演奏した，とあります。二段鍵盤，しかもペダルもある大オルガンを，まあバリバリとまではいかないまでも，ハリハリくらいは弾いたんでしょうね。(笑)これはヨーロッパ人はびっくりしますよ。ジパングというね，何か地球の果ての，野蛮人，原始人がきたように思っていた。その日本人が，自分たちの文化，自分たちの持ってる音楽，自分たちの楽器にもひととおり知識があり，それに関心があり，とにかく一通り弾きこなすことができた。これによって，ヨーロッパ人の日本人に対するイメージが一変いたします。原始民族なんてとんでもない，自分たちとは違うけれども，非常にレベルの高い文化を持った人間たち，それが世界の向こうに住んでいるんだと，気がついたわけですね。

したがって，少年たちにとっても，ヨーロッパ文化にふれたことはカルチャーショックでありましたが，同様に，文化は自分たちだけだと思っていたヨーロッパ人にとっても，自分たちとは違った非常に高い文化が他にもあることを知ったのは，大きなカルチャーショックでありました。その証拠に，この少年たちに関する本が，わずか2，3年のうちに，彼らが訪問したポルトガル・スペイン・イタリアのみならず，チェコでも

フランスでもドイツでも，なんと100冊ちかくも出版されているんです。100冊ちかくも出版するほどに，彼らにとっても大きなカルチャーショックだったんですね。したがって少年たちは立派に文化使節としての役割も果たしました。

当時の本は絶賛しております。毅然として，礼儀正しく，控えめである。実に立派である。そこまではいいのです。が，最後の一文がちょっと気に食わないのです。「毅然として，礼儀正しく，立派である。ただし」，ただしなのです。「容貌，すこぶる醜し」。(笑) ……まあね，イタリア人やスペイン人の基準からすると，あるいは容貌が醜いとうつったかもしれないけれども，とにかく立派な連中だと，感心するのです。

その少年使節が，日本に帰ってまいります。お土産をもってきました。いろいろありますが，中でも重要なのが印刷機です。その印刷機を使っていろいろな本を印刷します。当然キリスト教の教理書ですね。それから，辞典をつくります。イソップ物語，あるいは平家物語なども出版いたします。とくにこの辞書は重要です。ラテン語，ポルトガル語，日本語対照辞典，などを作っている。それを見ると，日本語もローマ字ふうに書いてありますから，当時の日本語がどんな発音をしたかということが，一目瞭然であります。その意味で，このキリシタン版というものはキリスト教関係のみならず，国語学，日本文化を知るためにも，重要な役割を果たすものなのです。

そしてその数多い印刷物の中で，1605年，慶長十年に，長崎で，ラテン語による聖歌を集めた聖歌集，「サカラメンタ提要」が出版されます。まちがいなくこの日本で，ラテン語の聖歌が，日本人によって，歌われていた証拠でございます。当時の記録によりますと，キリスト教を信ずる者のみならず，一般の侍までが堺の町をラテン語の聖歌を歌いつつ闊歩した，とあります。これは嬉しいですね。大小を携えてね，鉄扇持ってね，ラテン語を歌ってる姿を想像するだけで嬉しくなります。(笑)それほどまでに，キリスト教を信じていない人々にも口ずさまれた。とくに九州では，子供たち，少年少女たち，あるいは漁民たち，農民たちも，やはりラテン語の聖歌を歌っていた，という記録がございます。

さて，そのように上げ潮にあった日本におけるヨーロッパ音楽受容，洋楽受容も，ご承知の通りに，1614年ごろから始まった，キリスト教大弾圧のために，すべては消え果てしまいました。

せっかく上げ潮にあったわけでありますけれども，楽譜を持っているだけでもう，お前はキリシタンだ，というわけで，磔，火あぶりになってしまう時代になりました。たくさんあったであろう楽譜も，それから，竹をパイプにして作ったという記録が残っているんですが，その日本人が作ったパイプオルガンも，全部焼かれ，破棄されてしまったわけであります。日本におけるキリスト教，そしてキリスト教に関係のあるヨーロッパ音楽が，全て，失われてしまったのでした。

ところがここに一つ，細くて，しかし強い，不思議な糸が一本残っておりました。それが，今日お話申し上げる「かくれキリシタンの祈り」でございます。

このかくれキリシタンという方々は，あの厳しい弾圧のなかで，「私たちはキリスト教の信仰をやめました」と言って，奉行所で踏み絵を踏みます。「私たちは仏教徒です」，と言っておきながら，実は，心のうちの信仰を持ち続けていた人たちです。この人たちが，今でも九州のいくつかの地域におられます。

そのかくれキリシタンのお宅にうかがいますと，まず必要以上に大きな天照大神の神棚が祀られております。お茶の間には，これまた必要以上に大きな，立派な仏壇がございまして，ご先祖代々のご位牌が祀られております。ところが，人目につかない奥の納戸か何かの長持ちの中に，キリストやマリアのメダイや，あるいは聖画，聖像などを隠し持って，「納戸神様」として拝んでいらっしゃるのです。

この方々は，明治時代に一度顔を出しかけたのです。明治政府になりまして，そこで一度顔を出したんですが，じつは明治政府も始め，やはりキリスト教を弾圧しはじめるのですね。その証拠に，長崎のキリシタン達は，高知や津和野などに連れていかれて大変辛い思いをした。ところがそのキリスト教弾圧に対して，諸外国が圧力をかけた。そこで明治6年になってようやく，明治政府は泣く泣く宗教の自由を認めることになります。しかし，キリスト教を認めるとは言わないのです。そこがい

い加減に日本的です。「キリスト教禁止の札を撤廃します」，という言い方をする。何か日本の政治家が好きな言い方ですね。「認める」とはいわない。その札を「撤廃することにしました」，というわけなのです。

しかし一度穴から顔を出しかけたキリシタンたちは，明治政府までが弾圧したものですから，またひっこんでしまって，もうキリスト教の教会に戻らないのです。むしろ自分たちの信仰の方が正統だと思っている。したがって，カトリック教会に戻った方は，「新教の人」ということになるのです。普通「新教」というと，プロテスタントを意味しますが，かくれキリシタンにとっては，カトリックが「新教の人」なのです。

そして，400年の間に，正統な信仰を指導する神父様も全部殉教されましたから，だんだんに民俗信仰，あるいは神道，仏教などと混合してしまって，今ではちょっとわけのわからない，キリスト教とはかなり違った宗教になってしまっています。

一つ具体的なお話をしましょう。お葬式です。そのお葬式が変わっています。亡くなった方がでますと，まず，お寺からお坊さんをお呼びするのです。そして，お弔いのお経をあげてもらう。ところがそのお経をあげてもらっている最中に，何人かが人目につかない納戸に行きまして，「今，表座敷でやっているあの仏教のお経は，間違い間違い，取り消し取り消し」，というお祈りを始めます。(笑) そして，お坊さんがお帰りになると出ていって，もう一度，聖水をかけて，キリスト教式のお祈りをする。これを「もどし」とか「かえし」といいます。それを今でもやっていらっしゃる。

おわかりになりますね。初めはカモフラージュです。ごまかすためです。「私たちは仏教徒ですたい」，と言ってごまかす。仏教式にやらなかったらすぐにもキリシタンといって磔ですからね。一応カモフラージュとして，お坊さんをお呼びしてお経をあげてもらう。しかしそれがすむと，こっそりとキリスト教のお葬式をする。それははじめは，弾圧をごまかすためのカモフラージュでしたが，それが今や，かくれキリシタンの信仰の本質になっているのです。そういった変った宗教なのです。

そのかくれキリシタンの方々が「オラショ」，ラテン語の「オラシオ，祈り」からきている，オラショというお祈りを一時間ほど奉げられます。

その場所から申し上げますと，皆様方が長崎にいらっしゃるときには，大村という町がありまして，その大村の沖合いに島があり，これが飛行場になっています。その飛行場で降りて，橋でわたって長崎市にお入りになるわけです。そして佐世保という，昔海軍の根拠地であった町があります。その先に，平戸口という，日本で一番西はじの JR の駅がございまして，その沖合いに平戸島という島があって，そこにあるのが平戸の町です。かつてスペインの商館が置かれ，さらにイギリスの商館がおかれていたところですね。ですから，この平戸という町には独特の雰囲気がありまして，坂道の一番下には仏教のお寺があって，その上に神社があって，さらに上にキリスト教の教会があるという風に，渾然と一体になっている，いかにも日本的な光景が見られるわけです。

その沖合いに生月（いきつき）島という島があります。この島が，かくれキリシタンの住む島であります。他にもかくれキリシタンは，遠藤周作さんが「沈黙」のモデルとされた西彼杵（にしそのぎ）半島，あるいは浦上にもおられましたし，五島にもおられましたが，一番違うところは，生月のかくれキリシタンたちは，お祈りに声を出すというところです。他の地域のかくれキリシタンの方々は呟くだけです。見つかるといけませんからね，呟くだけです。ところが生月のかくれキリシタンの方々は，声に出されます。何故声に出すのか。私はこう思っております。

生月にはいたるところに聖地があるのです。殉教者を祭った聖地があります。そしてその聖地を，かくれキリシタンの方々は今でも崇敬し，お参りにゆきます。ということは，逆に言えば，生月の弾圧は表立った者だけ見せしめに殺して，ある程度お目こぼしがあったことを意味します。他の地域には聖地はまったく残っていないのです。ということは，みんな殺されてしまったということですね。殉教の聖地を拝む人さえいなくなってしまったということです。ところが生月だけは聖地がたくさんある。ということは，ある程度のお目こぼしがあったということになりますね。

何故お目こぼしがあったか。これも私の推論ですが，ここは昔から鯨が来ます。生月島のかくれキリシタンの人たちは，この鯨捕りに従事していたのです。約 3000 人の人々が，この作業に従事したといわれております。これは共同作業です。一人ではできないですね。一種のテクノク

ラートです。それを全部殺してしまったら，いわゆるオイルショックになります。現代で言えば石油が来なくなったと全く同じですね。つまり，日本全体の経済に関わることです。それに，離れ小島ですから，表立った者だけを殺して，あとはお目こぼしがあった。それが，生月の人たちが声を出して祈りを唱えることができた理由だと，私は思っております。

この生月のかくれキリシタンの方々が，中江ノ島という無人島に出かけてゆきます。この中江ノ島というのも聖地なのです。大勢のキリシタンたちを連れて行って，ここで殺しています。なぜ無人島で殺すかといいますと，本島で，みんなの見ている前で殺すと，一種の殉教になりますね。ますます信仰を励ますことになる。といって，舟の中で殺すわけにもいかない。だからキリシタンは離れ小島，無人島に連れて行かれて，そこで殉教することになった。

したがって今でも，生月のかくれキリシタンの最も重要な聖地は，この中江ノ島です。こんにち生月のかくれキリシタンたちは舟に乗ってゆきまして，そのものすごい岩だらけの島に上陸し，そして断崖絶壁のはざまに草の葉を置いて，瓶を置きます。そうして岩だらけの上に正座して，約1時間のオラショ，祈りを唱えます。そうすると，どんな日照りのときでも必ず水が滴り落ちるといわれています。そしてその水を神聖な水として，洗礼や，なくなった方を天国に送るための聖水としているわけです。何年保存しても腐らないといわれております。

持ち帰った聖水を使いまして，紙を十字に切りまして，それに聖水を打って聖別します。お守りなんですね。「おまぶり」と申します。そのおまぶりを，亡くなった方の耳に挟んでお棺におさめるとか，あるいは危険な場所に収めることによって，安全を確保する。また自分の家にかけたり，お薬代わりに飲む，というようなことをいたします。

このかくれキリシタンの方々が節をつけて歌う「歌オラショ」というのは，何がなんだかわけのわからない言葉によります。しかもメロディがあって歌うのです。日本の御詠歌かなんかみたいな調子の歌です。

これを私初めて聞きましたのは，今から30年ほど前になります。たまたま長崎に行ったときに，「県下の離れ小島に妙な歌を歌う連中がいます

から，聞きに行きましょう」と言われて，「何ですか」「かくれキリシタンの祈りですよ」「かくれキリシタンね，あんまり興味ないな」。

私は，遠藤周作さんの「キリシタンの里」っていうのを読んだけれど，何かかくれキリシタンというと，おどろおどろしいような存在で，とても行く気がしなかった。

「いやあ，とにかく行きましょう」「やだやだ」「行きましょう」，と，まるで拉致されるように強引に車に乗せられました。今は両方の島の間に橋があるのですが，昔は長崎からフェリーに乗って平戸に行って，また峠を一つ越えて，ここでまたフェリーにのって生月に，7，8時間かけて行き着きました。そして，そのオラショをうかがわせていただいた。

まだそのころ，30年前には，かくれキリシタンの方々は，よそ者に警戒的でありました。信仰の違う「エレンジア」，異教徒，が来たからどうしようか，ということになったわけですが，何しろ連れてってくださった方が長崎県庁のお役人です。まあ地方では一番偉い人です。そこで，「仕方がないですと，よかですと」，というわけです，お許しを受けまして，延々1時間するほどのお祈りをうかがいました。特に最後に，その「歌オラショ」をお歌いになりました。

私は初めて聞きまして，ビックリ仰天した。「これはいったい何語ですか」とお聞きしました。「これはカラコトバですたい，意味はまったくわからんですとー」というご返事なのです。中国語だとおっしゃる。しかし丁度私は16世紀のラテン語の宗教音楽を専攻しておりますから，これはラテン語がなまったに違いない，と当りをつけたわけなのです。

さあそうなると，今まで嫌だ嫌だといっていた人間が，急に目の色が変わりまして，もう何回も何回も生月島に通わせていただいて，「歌オラショ」の録音をとる。集落ごとに節回しがそれぞれ違います。それを全部録音をとって，五線紙に戻します。そしてもとのラテン語の聖歌を復元しようとしたのでありますが，今のカトリック教会の聖歌集には，この「オー・グロリオーザ」という歌は出てないのです。それではヨーロッパの図書館を探すほかない，というわけで，ヨーロッパ図書館めぐりを始めたわけであります。研究者が，「苦労しました」なんてことは口がさけても言うべきことではございませんが，まあ，苦労しました。

イギリスの図書館，ドイツの図書館，フランスの図書館，さらにイタリアの図書館，とくにローマのヴァチカン図書館。あのローマ教皇庁のヴァチカン図書館にはあるに違いないと日参いたしました。ヴァチカン図書館というのは本当に文化の宝庫でございましてね，たとえば伊達政宗がローマ教皇にお送りした手紙などが残っているのです。なにしろカード室だけで小学校の雨天体操場くらいの広さがあるのです。そこに古びたカードがあって，手書きで本のタイトルが書いてある。ただ本のタイトルしか書いてないのです。だからもうあとは，広いカード室の中から欲しい本を選び出すのは，勘と実力だけですね，それしかないのです。

しかもヴァチカン図書館というのは，1日に3冊しか請求できないのです。そのうえ開館時間が朝の10時から13時まで，もうそれで追い出されてしまう。その間に3冊しか請求できない。それでおそらくこれだろうと当りをつけて3冊請求する。届けられる。ところが3冊とも楽譜もなにもない，音楽とは関係ない本だってことがわかると，もう目の前が真っ暗です。「ああ，また今日一日，食事代とホテル代が無駄になった」。(笑)そういう日が何ヶ月も何ヶ月も続きましてね。どうしてもローマにはなさそうだ，イタリアにはなさそうだ，とポルトガルにも行って探す。

そして最後に，7年目ですか，スペインのある図書館で，請求した本を置かれた瞬間，「これだっ」と思いました。震える手で開けてみると，間違いなく「オー・グロリオーザ・ドミナ」，「おお栄えある聖母マリア」という，マリア賛歌の，夢にまで見たオリジナルの楽譜が，あったのです。

調べてみましたら，ローマではなかったわけです。それはスタンダードな聖歌ではなかったのです。スペインのある地域だけで，しかも16世紀にだけ歌われていた，いわゆるローカル聖歌。地方聖歌だったのです。それをその地域の出身の神父様が，いうなれば，「おらが村の聖歌」，「おらたちの歌」を，日本にお伝えになって，生月の農民，漁民たちにお教えになった。

そしてそれが400年の間に，命をかけて伝えた。見つかれば殺されま

す。紙に書いたらもう証拠になりますから記憶する。夜中に外に見張りをたてまして，習う者と教える者とが布団をかぶって，そうして教わって伝えてきた。見つかったら磔になる，その極限状況で，命をかけて歌い継いで，今日まで至っているわけです。メロディは日本的になってしまっていますが，音が上がるところは上がる。下がるべきところは下がる。ただその上がり方，下がり方が日本的になってしまっている。しかしとにかく，それを歌いついできた。そしてそれによって彼らは生きてきた。「祈り」，「歌う」ことによって生きてきた。

その事実を知りまして，私はたいへんに厳粛な思いにとらえられました。音楽というものははかないものです。線香花火と同じように，一瞬間に鳴り響いて消えてしまうものであります。音楽を聴いたからといって，病人が直るわけじゃない。おなかいっぱいになるわけじゃない。音楽なんて，なくたって人間は生きていけます。一見無用なもののようです。しかし，音楽によって人間の心は生きる。人間の心は生きるのです。音楽によって初めて，人間と人間の心が結びあわされる。「金で買えないものはこの世の中にない」，と豪語した青年がいますけれど，金で人間の心は買えない。人の心を結ぶのは，現世的な利益にかかわらない音楽であるということを教えられまして，まことに厳粛な思いでございました。

それでは結びに，その生月の方々がお歌いになる，日本語の歌をお聞きいただいて，私の話を終りたいと思います。その歌詞をご紹介しましょう。

まず１節。「前はな，前は泉水やな，後ろは高き岩なるやな，前もな，後ろも，潮であかするやな」。これは先ほどの殉教の聖地，無人島の中江ノ島の描写です。前は広い海。後ろは断崖絶壁。どこにも逃げ場所がない。そして多くの人々がここで殉教された。その殉教者に対する賛美と，どこにも隠れようがない「かくれキリシタン」たちの極限状況を歌ったものです。

２節。「ああ，この春はな，この春はな，桜の花かや散る散るやな，また来る春は，つぼみ開くる春であるぞやな」。今年の春はもう皆，桜が散るように散りぢりになってしまった。隣のばあさんも殺された，向かいのじいさんも火あぶりになった。みんな殉教して散りぢりになってし

まった。しかし，また来る春，未来は必ず蕾の開く花盛りの春。本当に我々の信仰を信じきれる時が来るに違いない。

3節が泣かせるのです。「ああ，参ろうやな，参ろうやな，パライゾの寺にぞ参ろうやな，パライゾの寺とは申するなや，広いな寺とは申するやな，広いな狭いなはわが胸にあるぞやな」。さあ，パライゾの寺，天国のお寺に参りましょう。その天国というのは遠いところだと申します。広いところだと申します。しかし，遠いとか近いとか，広いとか狭いとかいうのは，「わが胸にあるぞやな」。自分の心の問題である。

見事でしょう，天国とは，「わが胸にあるぞやな」。自分の心の問題なんだと，ズバリと言っている。しかもそれは，神学者が言ってるのじゃない。農民，漁民の方たちが，命をかけて至りえた境地なのです。「広いな狭いなは，わが胸にあるぞやな」。

もうこれ以上何も申し上げる必要はないと思います。かくれキリシタンによって，私は音楽のみならず，人間の生き方について大切なことを教えられたと思っております。これをもって私の話を終りにいたします。

付記：本稿は2006年7月9日に行なわれた「藤女子大学キリスト教文化研究所主催　第8回公開講演会」の内容を文章化したものです。